ありきたりな恋はしたくない。

浮影

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ありきたりな恋はしたくない。

【Ｎコード】
Ｎ７４５４Ｍ

【作者名】
浮影

【あらすじ】
え、あらすじですか？え、え？
ええ…と、ですね……。俺がただ綱海さんに片思いするだｋ（ｒｙ
ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー
はい、ざっくりいうとそんなものです。（ざっくりすぎねぇ？
ほぼ不定期で、まったくもってあらすじのつかない物語です。
本当に申し訳ございません。

まあ、ギャグコメなラブストーリーってことです。

因みに私的に「これ普通じゃありえへんやろ…」という恋を目指したつもりです

「これはひどい」と言わんばかりにgdgdですが楽しんでいただければ…

・ぷろろうぐ（前書き）

・まず始めに～読む前の注意

皆様どうも初めまして！浮影です。

この度はこのイナズマイレブン二次創作小説のＴ×Ｔを開いて頂き、有り難う御座います！

さてさて、まず始めに～読む前の注意ってことなんですが……

説明文っぽくこの書き方で書くのは自分は苦手なので、箇条書き風で許してください（土下座）

・立綱・綱立をメインとした小説です。

・つまりはＢＬ・腐向け演出？や表現等がよく登場します。

・苦手な方はまだ間に合う為、疾風ダッシュでお逃げくださいネ。

・途中途中で番外編というキャラ崩壊ギャグコメディが投入されてます。

・キャラ崩壊が苦手な方はそこだけ飛ばすか疾風ダッシュで（ｒｙ

・※但し、全ての話がちゃんと繋がるように構成してるので、飛ばして読むのはお薦めしないです

・で、僕はイナイレをちゃぁんと知ってる訳じゃないのでキャラ関係おかしかったらサーセン。

・小説は全体的に立向居視点で進みますが、口調おかしかったらすいません！

・試合？ナニソレ、おいしいの？

・作者の文法力の無さでキャラの言葉づかいがおかしいかもです。

以上がおｋである心が海のように広い方は、レッツゴー！

・ぷろろうぐ

俺は、何度あの人に助けられたんだろう。
俺は、何度あの人に慰められたんだろう。
俺は、何度あの人に呼ばれたのだろう。

そんなことは、数えなくたってちゃんと知っている、というよりも、数えなくたって御互いが分かりきっている事、だ。そんな事を、俺は思う。
あの人――――は、俺のことをどう思っているんだろう…？ただのかわいい後輩？それとも……
「おい、立向居ぃ！」
その声で俺の思考は途切れた。
いきなり呼ばれたので、応答するのに数秒間掛かった。
「ぁ、はっはいぃ綱海さんっ！」
「……ったくよぉ、大丈夫か？さっきからぼーーっとしてるぜ？」
「ぇ……はい、大丈夫です、すいません…」
「んー…まぁ、さ、調子悪いんだったら無理すんなよ？今日は特に暑いしな……」
そう、今日は今年で一番暑いといわれていた。まさに猛暑である。
綱海さんは、イナズマキャラバンに入るまでは沖縄の方で過ごしていたからこっちの方の暑さなら慣れているだろう。その綱海さんでさえも特に暑いという、炎天下で、練習をしていた所だった。この暑い中で練習を始めて、どのくらい経っただろうか……ベンチに置いてある時計を見ると既に3時間は経っているみたいだ…今日も俺はいつもの様に綱海さんと技の強化練習に励んでいた、けれど、最近はしっかり集中出来なくなって来ている。
何故かと言われても、何と言うか、ええと……とにかく、言葉だと説明できないような不思議な感情になるからで…

その不思議な感情というのは、最近になってからなるようになってきた。例えば、綱海さんに呼ばれたとき…とかによくなる感情で、綱海さんに呼ばれたとき以外はそんな風にはならない。もしかすると、俺自体が気付けない、本能的な何かがそういう感情にさせるのかなぁ、と考えた事もある、けれど。だとすれば、感情的にはもう少し説明し易いような感情になる筈だと思う。

でも…この綱海さんだけに抱くこの感情は、きっと「恋」なんじゃないかな……絶対に恋だ！とは言い切れないけれど、特定の人物――すなわち俺なら綱海さん――を好きである、事。俺は、綱海さんという人物が好きだ。綱海さんが好き……ということ、だから恋なのだと思う。あれ、でもちょっと待って……だとしたら円堂さんにもこの感情を抱いてもおかしくは無いんだけどなぁ……

「うぉいいっ、立向居ぃ！ホントに大丈夫かよ？」

「ふぁあわっ！？あぁぁあ…、はっはいぃ、大丈夫です！」

また俺の思考はそこで途切れた。

そ、その前に……綱海さぁあん！近いぃ、近いです！顔近すぎます！離れてくださいっ！どんっ！

「ぉわ、いやぁわりぃわりぃ。……おい、お前顔赤いぞ？熱中症にでもなったんじゃねぇのか？」

ふぇっ？なってませんよぉ、やだなぁ。俺も一応熱中症対策として色々やってるんですからそんな簡単になる――――

ぴとっ

何か温かいものがおでこに触れたと思ったら綱海さんのおでこが……ッ！？

「ん…ちょっとお前熱あるかも知れねぇなぁ……ちょっと保健室行って来い」

「ぉあっ！？あぁあああなあなあなあなあなあなあなな、何するんで…、」

「熱測ってんだよぅ。そら、早く保健室行って来いって」

「あ、ぅ。はい、分かりました…」

綱海さんが行け行け言うので、綱海さんから飛び去ったついでに俺は保健室の方へ駆けて行った。

――――保健室。

俺は先程の綱海さんの不意打ちによって顔が真っ赤になっていた、ので、保健室の先生も熱があると思ったらしく俺に体温計と氷水の入った小さい袋を渡された。渡すとそのまま先生は何処かへ去っていったけれど…俺は受け取った体温計を近くのパイプ椅子に置いて、熱くなっている頬に氷水を当てた。ひんやりして気持ちがいい。暫くして、丁度氷水が完全に液化し、まだちょっと冷たい程度になった頃に保健室のドアが勢いよく開いた。

「よぉ、立向居！どうだ？良くなったか？」

と、爽やかな笑顔で入ってくる綱海さん。はい、とっても良くなりました。

「そうかそうか、じゃ、一応熱測っとこうぜ！もしまだ熱があったら大変だしな」

と、言うと俺のユニフォームの下から脇へと温度計を差し入れられた。

「ひゃぅっ！？」

「ぅん？どうした？……お、測れたか、どれどれ。…３５．７度！うん、大丈夫だな」

俺がつい声を発してしまった数秒後に、綱海さんは体温計を抜き取って表示された数字を読み上げた。あぁもう、いきなり服の中に手ェ突っ込まれたら誰だってそういう声出しますよ…きっと。

「はぁ…もう、いきなり服の中に手を入れないで下さいよぉ。」

「ハハハ、わりぃわりぃ。」

もう、わりぃわりぃ、じゃないですよ。んもー。……ぁ、またこの感じ…。この感じ――というのは、あの不思議な感情のことで、やはりこの感情というのか、なんというか…。また顔が熱くなってるッ、咄嗟に手にもっていた生ぬるい水入りの袋を頬に押し当てた、

ちょっとくらいは冷やせるだろう。

ーーーーー時間経過ーーーーー

その後、立ち眩みがするので部屋に戻ろうとしたら……綱海さんに捕まりました。そしてそのまま部屋送り。

「ぜっーっぜーっぜーっぜぇ、はっ、ぜぇーっはぁああーーーっぜぇええーーーっっ……」

と、聞いているだけで息苦しくなる……ような声をあげている綱海さんは、顔を真っ赤にして肩で一定のリズムで息を整えている。

何故こんなことになったのかというと……

まず、俺を部屋へ送るために綱海さんはわざわざ俺を負ぶってくれて、そのまま部屋まで全力疾走――した所、こうなりました。

「じゃっ……ぁあ、しっか、っり……や、休め……よぉ？」

と、途切れ途切れに言う綱海さんこそしっかり休んだ方がいいとおもいますが……。というよりも、何も全力疾走する必要は無かったと思うんですけど……？

「ふっ……何、言ってんだよ。こんなこと海の広さに比べれば、ちっぽけなもんさ……っはぁっ」

まぁ……、そう、ですけど……ね。とりあえず俺の部屋で休んでいったらどうですか？

「おっ……おう、じゃあ休ませてもらう、な」

そういって、綱海さんは俺のベットに倒れこんだ。

・心の病？いいえ、恋の病です多分。

今の時間は、１８：４６……あれっ！？
気付いたら日はすっかり落ちて、辺りはもうそろそろ暗くなる頃だった。綱海さんに部屋に送ってきてもらったのは――二時間前！？
すっかり俺たちは眠り込んでしまったようだった。綱海さんは練習に戻っｔ――――
「くかーーーーーーーーっ」
どてっ
えっ……、えっ、綱海さん……寝て……る？え、ちょ、綱海さん！綱海さぁん！つーなーみーさぁーん！！
「うぉおッ！？ぬー、ぬーやっさー、ぬーやっさー！？？」
！？何語！？えっ、何語ですか、日本語でおｋ、え、沖縄方言？あ、なぁーんだぁ、よかった。
「あ、わりぃわりぃ、つい方言で喋っちまったな、ハハ……」
全然大丈夫ですー……。けど、練習――いいんですか？もうこんな時間ですからもう終わってますよ多分……。
「えー……そんなこと海の広さに比べれば（ｒｙ」
えぇ……そんなことで本当に大丈夫なんですか？心配だなぁ……なんだか。

――暗転――

そんなこんなで……。俺はその日、いつもよりも早めに眠った、んだけども…。次の日の朝……つまり今朝。昨日に比べてかなり体がだるかったので、大事をとって練習を休み、一応熱を測ってみた、ら。

「３８．４℃」

!?
なんとまぁ、高熱だったという訳なんです。……どうりでぼーっとする訳だ…。

「嗚呼なるほど……まぁー…これだけ熱が出てたらそりゃあ――」

▼　窓　から　綱海　が　見ている　！

!?
え、えぇえええええぇぇぇぇぇぇぇ!?え、何のフラグですかこれ!?おしえてえらいひと（ｒｙ

「よう立向居!調子どーだぁ?」
「あ、っと……熱がありました。」
「そかそか、で、うん、なんだろうな、ええと…」
何ですか?……もしや…
「いやっ、何でもねぇ!じゃ、俺は様子見に来ただけだからな。じゃな!」
「えっ、ちょ、綱海さんま」
そのまま綱海さんは部屋からアクロバティックな走りで出て行ってしまった。一体さっきのはなんなんだろう…気になるなぁ。

―時間経過―

その日、俺は一日中寝ていたんだけれど、どうにも調子は良くならなかった。はぁ……どうしてだろうなぁ、風邪なのか?インフルエンザか?はたまたノロウイルス（ｒｙ

…んな訳ねーよっw
と、自分でツッこんでみたり…ね。
でも調子がおかしいのは体だけじゃなかった……心…もおかしいんだよな。
そう、あのひとを想うと胸がズキズキと痛――――

乙女かっ！

はぁ…もうさっきからこんなんばっかりだな……どうしちゃったんだろ俺……。
もういいや……とにかく治るまで寝てよう。

そうして俺は眠りについた・・・。

翌日。。。

朝起きてみると体が軽い。体温を測ってみると……おっ「３６．４℃」！
一晩眠っただけなのに、もう治っちゃったのか…すごいんだなぁ、眠るって……；
一応今日は安静にしていよう。もし再発したら元も子もないからな。

…そうだ、練習見に行こう！

一方その頃綱海たちは…
「いくぜ吹雪！」
「おいで綱海くん！」
「ツナミブースト！」

「エターナルブリザード！」

と、技の出しあいをしていたそうな。

…着いた着いた。まだ始めたばかりみたいだ…良かった。

「お？立向居、もう平気なのか？」

「あ、円堂さん。もう平気ですけど、まだ心配なので今日は見学してますね」

「おう！じゃ、しっかり見ててくれよな！」

「はい！」

そして暫くすると、練習試合が始まった。

…まぁ試合というか、ミニゲームという感じかな？今回はポジションを変えて行うらしい。いったいどんな試合になるんだろう……。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7454m/

ありきたりな恋はしたくない。

2011年5月16日23時24分発行